

〔書評と紹介〕

六ヶ所村「尾駱の牧」歴史研究会編

『尾駱の駒・牧の背景を探る』

福田 友之

本書は、六ヶ所村「尾駱の牧」^{おぶち}歴史研究会が、平成二十四（二〇一二年）から二十九年にかけて、毎年、地元で開催してきた「六ヶ所村歴史フォーラム」の講演・発表を基にした論考集である。考古学・歴史学・文学的考察の三部構成で、各内容と執筆者は次の通りである。

第一部 考古学的考察

六ヶ所村に馬はいつからいたか？（松本建速）

東北地方北部出土の石帯とその背景（田中広明）

東北地方北部出土の緑釉陶器とその歴史的背景（高橋照彦）

コラムⅠ 陸奥湾東岸域（野辺地地区）の環濠集落

― 二十平（一）遺跡を中心として―（瀬川 滋）

コラムⅡ 三沢市「平畑（一）遺跡」の特徴について（長尾正義）

第二部 歴史学的考察

藤原道長と馬、そして尾駱の駒（倉本一宏・堀井佳代子）

建武期の糠部と尾駱の牧（伊藤一允）

「尾駱牧」「糠部駿馬」をめぐる人・物・情報の交流について

（入間田宣夫）

コラムⅢ 平安時代の都の馬事情―上賀茂神社を通して馬を考える―

（藤木保誠）

コラムⅣ 糠部郡内の十烈、流鏑馬（栗村知弘）

コラムⅤ 日本前近代の馬（近藤好和）

第三部 文学的考察

平安貴族と馬―みる・祈る・おそれる―（飯沼清子）

ユーラシアを西から東へ駆けた斑動物たち、そして尾駱の駒へ

― 斑馬は聖獣だった―（山口 博）

歌語「尾駱の駒」を育んだ王朝歌人集団（山口 博）

王朝歌人の陸奥心象風景と現実（山口 博）

コラムⅥ 巡方瑪瑙帯のその後（飯沼清子）

これらの論考のなかで、とくに興味のある部分を中心に紹介したい。さて、本書を順にみると、まず、第一部、「六ヶ所村に馬はいつからいたか？」では、青森県では七世紀中葉の古墳などから出土する轡^{くわ}などの馬具や埋葬馬により、この時期から馬の飼育が始まったとし、東北東部の黒ボク土は、牧畜のため平安期以来行ってきたイネ科植物の草焼きの結果とする。またこの地域は、奈良期以前の集落はみられないが、九世紀後葉〜十世紀に増加するのは、馬の飼育が行われたためで、六ヶ所村では、馬歯や馬具などは発見されていないが、どこか馬を飼っていた地域から来た集団が馬を飼いはじめたと推測する。

次の「東北地方北部出土の石帯とその背景」では、尾駱沼南岸の表館^{おもてだて}（一）遺跡から出土した九世紀末〜十世紀の白玉製品を、古代の中央・地方の官人が腰にまく皮帯の装飾品「鈍尾^{だび}」とする。帯飾りは身に着ける官人（役人）の位階によって明確に区別され、平安期を通して使われ

た。平安初頭からは、国司など極めて限定された官人にのみ許される白玉帯の石飾りが、京や国府・郡家などの地方官衙から遠く離れた一般の集落跡にあった理由については、単純ではないが、交易に深く関わった雑人^{ぞうじん}が出羽国や陸奥国の国守を介して接触した際に得たものであろうとする。また、関連して、腰帯の製作者・製作方法、白玉帯の使用者、海外からもたらされた腰帯、腰帯の売買例なども紹介する。

次の「東北地方北部出土の緑釉陶器とその歴史的背景」では、東北北部出土の緑釉陶器には東海産や近江産が多い傾向にあることを指摘し、この地域の九・十世紀を中心とする出土例について、出土状況や出土した背景を述べる。そして、十世紀頃になると城柵官衙からの出土例が急減し、城柵以外の例が増えることから、本県の出土例は私的な交易活動によるものと捉えることも必要だとし、平畑（一）遺跡には、京近郊の窯跡産のものが多く点から、特殊な経路を推定し、エミシの有力者が京の王臣と直接つながることで入手した可能性も指摘する。

コラムIでは、遠方との交易を窺わせる隣接地の例として、各調査の担当者が、陸奥湾東岸域の大規模環濠集落跡、同IIでは、平安京近郊の篠窯産^{しの}とみられる緑釉陶器を多数出土した遺跡の調査例を紹介する。

次いで、第二部、「藤原道長と馬、そして尾駮の駒」では、陸奥の馬を所有し、平安中期に太政大臣として権勢を誇った道長と尾駮の関係を明らかにするため、まず、「尾駮の駒」の初源となる『後撰和歌集』（九五五年頃成立）にある、よみ人知らずの「みちのくの をぶちの駒も野飼ふには 荒れこそまされ なつくものかは」（陸奥の尾駮の駒も野飼いすれば ますます荒れることはあつても なつくことはないでしょ

う）という、馬にたとえて女性心理を詠んだ歌を紹介し、「をぶちの駒」は黒毛馬の意味もあるが、他の歌集にも「みちのく」と併用される点から「をぶち」を地名と解する。また、「をぶちの牧」は、鎌倉初期の歌学書『八雲御抄』^{やくもみしよう}にあるだけで、歌人たちが想定した牧である可能性を指摘する。道長との関係については、道長の日記『御堂関白記』に、たびたび「陸奥」と「馬」が一緒に登場し、道長が陸奥の馬を多数所有しているのは、陸奥守に任じた道長の家司、藤原済家との関わりからであらうとし、さらに、その馬のもつ意味についても述べる。

次の「建武期の糠部と尾駮の牧」^{ぬかのぶ}では、本県の中世史研究は津軽が主であったが、今後は、南部糠部の研究の必要性を説き、糠部の給人^{きゅうにん}に焦点をあてる。そして、その一人の安藤宗季への譲状にある「なかはまのミまき、みなと」の「なかはま」「みなと」を津軽の地名と解してきた通説に対し、糠部の長浜（のちの木崎野であらう）・八戸湊に比定し、鎌倉末期の史料にある「糠部郡七戸御牧のお馬のこと、」について、七戸には現六ヶ所村も含まれるとし、七戸御牧は古来の尾駮牧とする。

次の「尾駮牧」「糠部駿馬」をめぐる人・物・情報の交流についてでは、中世、糠部駿馬を産みだした一戸／九戸の岩手県北、本県南部の牧がどう形づくられ、また十一世紀に建郡された糠部・津軽・鹿角・比内の北奥が、列島の中でなぜ特別の意味を付与されたのかについて述べる。それには、元慶の乱（八七八年）以降、津軽と南部が岩手県北の七時雨峠^{しぐれ}で陸奥国府と結ばれたことが大きいとし、このルート「文明の十字路」により陸奥馬牧の整備や道長らへの陸奥交易馬の貢上^{なま}につながり、延久二年（一〇七〇）の北奥合戦以降、平泉藤原氏による奥大道整備^{おくたいどう}・

糠部駿馬の掌握、鎌倉期には北条氏による馬牧群の掌握が進み、馬産地としての名声が高まった。また、この政治的ルートとは別に、日本海側には珠洲系、太平洋側には常滑・渥美焼系陶器にみられるような民間レベルの交易も展開する。そして、尾駿牧は七戸辺りにあったとする。

次いで、コラムⅢでは、馬との関わりの深い京都上賀茂神社の競馬では、平安期には南部の馬が使われたと推定する。同Ⅳでは、糠部の神役行事として、八戸市櫛引八幡宮で行われた十烈(競馬)・流鏑馬の史料を紹介し、同Ⅴでは、役畜の馬には馬具が前提で、手綱・銜から鐙に至る馬具について成立順に述べ、今の日本馬の起源を蒙古野馬とする。

第三部、「平安貴族と馬」では、『小右記』、『御堂関白記』、『古事談』、『枕草子』などにより、貴族と馬の関わりをたどり、「みる」では「千里の骨」、黒毛馬の「翡翠」、上がり馬(跳ね馬)、上馬・細馬(良い馬・優れた馬)を、「祈る」では、病の平癒・除病・息災を祈る例を、「おそれる」では馬の荒々しく跳ね上がる光景、落馬などの例を紹介する。

次の「ユーラシアを西から東へ駆けた斑動物たち、そして尾駿の駒へ」では、なぜ斑の馬が尊重されたのか。中国・インド・ペルシャなど各国の斑馬を紹介し、斑は聖なるものの象徴で、和歌にある「尾駿の駒」は荒馬ではなく良馬とする。次の「歌語『尾駿の駒』を育んだ王朝歌人集団」では、尾駿の駒を詠んだ歌人は陸奥に関わる王朝貴族であろうとし、『後撰和歌集』から、大納言藤原兼家の時代の『蜻蛉日記』、その後の『後拾遺和歌集』へと「尾駿の駒」が詠まれ流布する状況や、その歌人たちの人間関係について述べる。そして、とくに兼家の時代に、「尾駿の駒」を歌語として定着させたとし、しかも本来の神聖な斑馬から荒馬のイ

メージを伴った歌語になったと述べる。次の「王朝歌人の陸奥心象風景と現実」では、都の歌人が歌った陸奥の地名や歌枕にはどんなものがあり、陸奥に対しどんなイメージを抱いていたのか、また、陸奥を体験した者は何を感じたのかを『万葉集』以降の歌集等によって述べる。陸奥例に石城(岩木山か)、その浜、津軽をあげ、「尾駿」については、地名なのか斑模様なのか平安後期からあった論争に対し、『後撰和歌集』の「をぶちの駒も」を「神聖な斑模様の馬でも」と解し斑模様説を採用。また、「陸奥」の歌枕の流布については、陸奥の歌が多い『古今和歌集』が歌の手本であったことや、藤原兼家の力があつたからだとし、陸奥礼賛の風雅表現は『古今和歌集』の影響や、実体験のない心象風景の形成によるもので、現実には、流浪先、死の恐怖、粗野で無教養・デリカシーの欠如、拒否感を伴う赴任先として陸奥の例を挙げる。

次いでコラムⅥでは、石帯に関する古記録として、鎌倉期の摂政・関白で、道長の後裔にあたる近衛兼経の『岡屋関白記』に見える、兼経元服・叙爵の装束の石帯が瑪瑙帯であったという記載を紹介する。

以上が本書の内容である。本書は、平安貴族の歌に詠まれた「をぶちの駒」を端緒に、六ヶ所村一带の古代文化から中世糠部郡の馬の文化を主にして、考古学・歴史学・文学の面から総合的に考察した論考集である。現時点における最新の成果を紹介するとともに、その歴史的背景や今後の問題点も指摘している。一般の方にもわかりやすい表現で述べられており、興味のある方にはぜひひご一読いただきたい書である。

(A5判、二五五頁、二〇一八年七月、六一書房、価格二五〇〇円+税)
(ふくだ・ともゆき 日本考古学協会会員)